徳永直の会 会報

第７２号

巻頭言

徳永直の会会長　高木　陽助

明けましておめでとうございます

早いもので一昨年の年末は「徳永直没後六十年記念事業」の準備で忙しく、かろうじて実行委員会の方々の協力によって何とか進めることが出来ていた。

昨年は二月の孟宗忌（十二日）、講演会（五月二十六日）を皆様のお力によって何とか成功裏に実施することが出来た。特に中島京子氏の講演会で予定の百人を超える聴衆に参加していただけたことは望外の喜びであった。関係各方面の方々に感謝の意を表したい。

昨年十月末には報告集の冊子も出来、会員各位に送付できた。まだ送付しなければならないところや残務処理が若干残ってはいるが、一応「徳永直没後六十年記念事業」終了といえる。お世話になりました。

ただ、この事業を実施する上で気になったことがある。徳永直が亡くなって六十年。一九二九年、『太陽のない街』を「戦旗」に発表して八九年、徳永直が熊本県の近代文化功労者に選ばれて十一年、昨年七月には岩波書店から『太陽のない街』の改版が発行された。徳永直が全国の人々に再評価される機会になれば嬉しいのだが、まだまだ認知度が低い。いかにして徳永直やその文学について理解していただけるか。課題は多い。

目次

・巻頭言　高木陽助：ｐ１
・「文学碑の土地購入を―徳永直顕彰の新たな運動へ―　中村青史：ｐ２
・文学散歩⑮『カツドウシャシン』　緒方宏章：ｐ３
・第四十一回「孟宗忌」報告　：ｐ４
・二〇一八年決算報告及び二〇一九年予算案　：ｐ５
・第四十一回「孟宗忌」及び「平成三十一年総会」案内他　：ｐ６

今年五月天皇陛下の退位に伴って日本社会が大きく変わるかもしれない。変わらないという人もいるだろう。

大正天皇から昭和天皇に引き継がれた一九二六年（昭和元年）二十七歳の徳永直は共同印刷ストライキに参加している。そして、この時の経験が三年後の『太陽のない街』となって結実するのである。昭和天皇の即位がなければ、あの有名な『太陽のない街』の冒頭は生まれなかったかもしれない。

「電車が停つた。自動車が停まった。―自転車も、トラックも、サイドカーも、まっしぐらに飛んで来ては、次から、次へと繋がって停まった。

―どうした？

―何だ、何が起ったんだ？

密集した人々の、至極単純な顔と顔を、黄色っぽい十月の太陽が、ひどい砂埃りの中から、粗っぽくつまみ出していった。

人波は、水たまりのお玉じゃくしの群のように、後から後から押して来ては揺れうごいた。

―御通過だ―摂政宮殿下の高師行啓だ！
最前列の囁きは、一瞬の間に、後方へ拡がって行った自動車は爆音をとめ、人は帽子を脱った。

（『太陽のない街』冒頭より）

文学碑の土地購入を
―徳永直顕彰の新たな運動へ―

中村青史

徳永直文学碑は、ここ二十年来危機に瀕している。風致地区で手が付けられないと思っていたのが誤りであった。こんなザル法に頼っていたのが不覚だった。

徳永直文学碑は没後二十年を記念して建立された。一九七八年のことである。当時土地の提供者は、「ここは風致地区に指定されたので、何にも使えない、そんな有意義な物なら喜んでお使い下さい」ということで、お借りした土地であった。ところが、その土地所有者が破産してその土地が競売になった。その時点で文学碑は安心できなくなった。ただ、その当初は「風致地区」を盾に取って何とか守り続けてきたが、その「風致地区」の管理が県から市に移行したあたりから、肝腎の「風致地区」があやしくなったのである。

徳永直を顕彰する会としての徳永直の会はもともと熊本徳永直の会と熊本を冠していた。全国にもいくつかそんな会が出来るだろうと思ったからである。しかし、他の地区にはなかなか徳永直の会が出来なかった。それで熊本を取り「徳永直の会」とした。結局、文学碑もこの熊本だけである。顕彰会も熊本だけである。その点全国唯一のと胸を張ってもいいわけだが、考えてみればふるさとだから当然のことではある。

文学碑建立には、全国から寄附金が寄せられた。直と同期の作家たちからも寄せられた。地元では広範囲の人々が協力した。「他所では出来ない、熊本だから出来た」「これは奇跡だ」など、建立当時言われたのである。それほど難しい事であったのかは、そのころは分からなかった。日がたつにつれ徐々に分かってきた。そのことを書くとなると日本の戦後文学になってしまうので、ここでは止める。いろんな意味で、大変な重いものを内蔵している文学碑である。

徳永直の会は三つの節目を持っている。最初は顕彰会の結成と文学碑の建立、そして文庫版の徳永直短編選集の発行。これらは没後二十年を記念しての事業であった。

次は没後五十年記念事業、二〇〇八年五月針生一郎氏の基調講演とシンポジウムの開催。そして何より『徳永直文学選集』（二〇〇八・五・刊）、『徳永直文学選集Ⅱ（二〇〇九年一二・刊）の刊行があった。この二冊で徳永直の主な作品は読めるようになった。顕彰会発足当初からの悲願が八割がた達成された。

この年には重大なおまけが付いた。それは徳永直が平成二十年度近代文化功労者に選ばれたことだ。これは熊本県教育委員会が近代文化貢献した人に贈る賞である。三番目が今年没後六十年記念事業である。記念講演（中島京子氏）、朗読劇（他人の中）、シンポジウムは開催した。もう一つの目玉が文学碑土地の取得への提言である。

具体的な取り組みはこれからであるが、急を要する件である。

（二〇一八年七月）

文学散歩⑮

『カツドウシヤシン』

緒方　宏章

藤崎宮

カツドウシヤシンをいまは映画といふ。若い人達は、昔の人間の称び方が古くさいのだと思つてるらしいが、私はいまは「映画」でも、昔はやはり「カツドウシヤシン」であつたと思つてゐる。

いつごろ日本にカツドウシヤシンが輸入されてきたのか、私はつまびらかにしないけれど、郷里の熊本市で、私がはじめてみたのは、たしか十二歳の時だつた。もつとも私より大人で、金持で、ハイカラな人は、同じ熊本市でももつと早くみた人があるかも知れないが、いづれにしろさう何年もちがいはないだらうと思ふ。勿論常設館が出来て〝泰西連続映画〟「名金」とか「鉄の爪」とかいふのが、「学生の都」熊本市を沸きたたせたのはずつと後で、私が十六、七のときだ。「連続」といふのは、一つの映画が一部分づつ週毎に進んでゆくのをいふので、「名金」など、たしか六、七週間かかつたやうだ。〝快漢ロロー〟とか〝グレースカーナード嬢〟などといつたら、いま五十前後の人々は、たいていニツコリするだらう。

〝西洋発明活動大写真〟といふ赤地に白ぬきの大看板を、秋祭のある熊本市藤崎宮の境内ではじめてみたとき、私はどうも腑におちなかつた。写真が動く、そんなことがあつてもいいものだらうかと考へた。その藁筵でかこまれた小屋は、おそろしく背がたかくて、風にはためいてゐる布地の大看板をみあげてゐるうち首が痛くなつたのをおぼえてゐる。

果たして写真が動くか動かないか？それは内部へはいつてみなければわからないことだが、さて私は入場料を持たない。貧乏人の小伜である私は、この年に一度の秋祭に大きな二銭玉銅貨一つもらつたのであるが、すでに肉桂を五厘買ひ、紙の鉄砲玉を五厘買ひして、もう一厘も持つてゐなかつた。おまけに「木戸料」は大人五銭、小人三銭だから、最初からのぞみがないわけだ。

『さあ、せいようはつめいのカツドウシヤシン、いらはい、いらはい』

たかい台の上に坐つて、赤いシヤツを着た男が拍子木を叩きながら呶鳴つてゐる。何かもの哀しい楽隊が鳴りひびく。入口のまへの人だかりはふだんに動揺する。ながいこと私の傍らにたつて大看板をみあげてゐた学生が、ツイと決心した横顔をみせて木戸をはいつてゆくと、おいてきぼりをくつたやうに私は淋しくなる。

『さあ、さあ、せいようはつめいのー』

しかし、赤いシヤツを着た木戸番は、ときどき片手で紐を引きながら、入口の垂幕をさつとあけてみせた。さいしよは大きな白い布にチカチカしたものが動いて、「あつ人間だ」と気がついた瞬間にはもう垂幕がおちてしまふ。頭の上でまた一きわたか

藤崎宮参道

く楽隊がきこえてくる、―峯よりおつる瀧の音―。

『さあ、大人は五銭、子供は三銭―』

私には楽隊が苦痛である。こめかみのあたりを、これでもか、これでもかと締めつけるやうだ。それでも私はいま一度あきだらうと、赤いシヤツが右手をのばすのを待つて居る。そして到頭夕方になるまで、私は小屋の入口にたちつくしたー。

いま考へてみると、その写真は五メートルか十メートルのフイルムだつたらしい。何十回つだか垂幕が五秒だか十秒だかあくのをみてゐても、ただ一つの場景であつた。ズボンを穿いたおそろしく長い脚が二本、風にふるへながら歩いてくるところ、こんどはそれが全身になつて、パイプをくはへた髭づらの男が水のそばにしやがむところ、大きな靴の下に大きな杭があつて、それに水がバチヤツバチヤツとぶつかつてゐる。またおそろしくながい脚が二本、白い布と一緒にふるへながらあるいてくる。そしてまたパイプをふはへた髭づらの男が……。

（美和書房発行　創作集「小さい記録」より）

＊旧漢字は新漢字に直しましたが、歴史的仮名遣いはそのままにしています。

熊本の最初の活動写真常設館は、電気館で、明治四十四年に現在のシャワー通りに開業した。（この年の三月に、直は黒髪尋常小学校を卒業している。）その後電気館は、大正三年に現在地（新市街）に移転した。（この年の春、直は若宮商店での丁稚奉公を辞めて、熊本毎夕新聞社で再び文選工となった。）

藤崎宮例大祭は、毎年秋に行われている。神幸式（馬追い）で有名である。当時、どの場所に小屋が掛かっていたのであろうか。

第四十一回「孟宗忌」報告

期　日　平成三十年二月十二日（月）午後二時から

場　所　立田山登山口

「徳永直文学碑」前

式次第

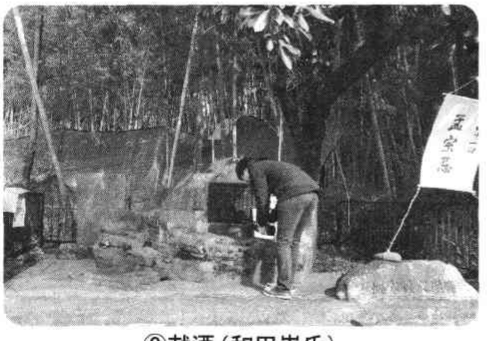
①会長挨拶　高木　陽助

②献酒　和田　崇

③献花　参加者全員

④メッセージ　金野　文彦

⑤経過報告　高木　陽助



②献酒（和田崇氏）

③参加者による献花

①高木会長挨拶

④メッセージ（金野文彦氏）

「孟宗忌」を詠む

永田　満徳

粧信となる正義感若葉冷
碑文には労働讃歌春日射す
公園の一角ほどの労働祭
満潮のあれが水俣秋の雲
群をなすことを力に鶴引けり

集合写真

２０１８年会計報告			
収　　入		支　　出	
繰　越　金	８７，０７２	事務関連費	４，５９７
会費（33 人）	６６，０００	通信関連費	０
利　　子	８２３	総会関連費	０
寄　　付	２，０００	碑前祭関連費	３，０００
定額預金解約	２００，０００	会報関連費	１９，４００
		くまもと文化振興会関連費	２０，０００
		ＨＰ関連費	３，７３６
		没後６０年賛助金	２００，０００
収　入　合　計	３５５，８９５	支　出　合　計	２５０，７７３
積　立　金	０	繰　越　金	１０５，１２２

以上の通り相違ありません。

２０１８年１２月２９日

会計　荒木　恵

会計監査の結果、問題はありません。

２０１８年１２月２９日

監査　田中　耕二

２０１９年予算案			
収　入		支　出	
繰越金	１０５，１２２	事務関連費	１０，０００
会費	６６，０００	通信関連費	１０，０００
雑収入	８７８	総会関連費	１０，０００
		碑前祭関連費	１０，０００
		会報関連費	３５，０００
		くまもと文化振興会年会費	２０，０００
		ＨＰ関連費	４，０００
		予備費	２３，０００
		積み立て	５０，０００
収入合計	１７２，０００	支出合計	１７２，０００
積立金	０		

徳永直没後六十年記念事業への寄付金の御礼

寄付金（人数）

二十万八千円（二十五人）

ご協力ありがとうございました。盛会のうちに終えることが出来ました。講演等の詳細につきましては、先日お送りしました報告書「時空を超えて～徳永直の『追憶』～」をご参照下さい。

会費納入について

二〇一九年の会費納入を、「孟宗忌」当日に持参されるか、同封の振替用紙にて振替を、よろしくお願い申し上げます。

会員の募集について

会員数が伸び悩んでいます。お知り合いの方のご紹介をよろしくお願いします。

「第四十二回孟宗忌」と講演会・総会・偲ぶ会のご案内

期　日　平成三十一年二月十日（日）

「孟宗忌」　場所：立田山登山口「徳永直文学碑」前
受付：十三時三十分　開始：十四時

「講演会」　場所：ガーデンパーティー（上通り草場町）
開始：十五時三十分

「総会」　場所：ガーデンパーティー　開始：十六時

「偲ぶ会」　場所：ガーデンパーティー　開始：十七時
会費：三、五〇〇円（当日徴集）

印刷所　㈱昭和印刷　三四四―五二五二・三四三―三八八六